



“演劇”で見つけた“青春”

水海道一高演劇部が関東大会へ

茨城県高等学校演劇祭がこのほど取手市民会館で開かれ、県立水海道第一高等学校演劇部が優秀賞を受賞し9年ぶりに関東大会への出場を決めた。

36回目となる同祭には県内6地区の予選を勝ち抜いた11校が参加し、保護者や審査員を前に各校が1時間の持ち時間で熱演を繰り広げた。

同校は渡辺嵩宗（たかむね）さん（2年）創作のオリジナル作品「そうゆうもん」で大舞台に臨んだ。「異世界転生」がテーマで、一度死んだ主人公の優希が中学時代の父親の肉体に入り込み「過去」に転生する青春ストーリー。両親の同級生が営む理髪店に通っているのですが、反抗期の時に愚痴を聞いてもらっていました。その時に親の昔話に触れる機会があって、高校時代の父と母に会ったらどんな感じだろうと思ったところから着想を得ましたと渡辺さん。脚本はすでに10回以上手直ししており、地区予選の時より進化させた。仲間とも考え方をすり合わせますが、自分が納得しないと変えません。言わ

れた通りに直すのは、違うと思うから」と手腕を発揮する。元々バスケをやっていたが運動が苦手で文化部っぽい活動をしている同部へ。成り行きで入部したものの同じ目標でつながる演劇部の空気感に心地良さを感じるようになり、気が付けばここが大事な場所になった。

舞台監督の森美優さん（2年）は、部長として個性豊かな部員たちをまとめる。「やる

気があるメンバーがそろっているの、時にはキャストとスタッフ、それぞれ異なる立場で意見が対立することもあります。最後はまとまります」と、団結力の強さを口にする。中学の時に学級紹介でやった劇をきっかけに同部へ入部。「虚構をリアルに近づけて、本物の感動を提供するのが演劇の世界。緊張はお客様に伝わってしまうので、関東大会ではまずは自分たちが楽しみたいです」と意気込む。

県大会の時に審査員から指摘された大道具の場面展開の時間短縮を関東大会への課題に掲げ、部長として部を引っ張る。

部内のオーディションで主役の優希役に抜擢された小林飛奈太（ひなたさん）（2年）は「演劇の世界で生きる強烈なキャラクターを大げさに演じつつも、日常に生きる人間として表現することが難しくもあり楽しい」と役者ならではの視点を打ち明ける。主役は今作が初めてで、1年の時に短い場面でキャラクターをどう見せるか試行錯誤した経験が力になっているという。中学ではソフトテニス部に所属し、演劇の世界は高校へ入学してから「わちゃわちゃした部の雰囲気とチームで丸となる感じがおもしろい。関東大会では、他校の演劇を

念入りの発生練習が本番に生きる



見ることも楽しみです」と期待する。

春の新人歓迎会でカーテコンコルに登場した先輩たちのまぶしい笑顔に魅せられて入部した中島咲さん（1年）は、江沢京子役を演じる。「台本を寝落ちするまで何回も読み込みました。キャラクターを好きになることが、演じる上で大切だと思っています。活発で思ったことをすぐに口に出し、人に弱みを見せない京子ちゃんが大好き！自分とは丸つき違うタイプですが、京子ちゃんのようになりたいです。仲間や観客から、京子役を任せて良かったと思ってもらえるように演技たいと目を輝かせる。

同部は現在、2年生7人、1年生5人の12人が所属する。顧問の清水大典教諭（34）は、「本番を踏むことに劇的に良くなる底力がある」と部員らを評価する。大学時代に学生演劇に没頭した時期もあり、自ら演劇部の顧問を志願。「生徒の希望を成立させる手助けをするのが私の役目。一緒に『表現』を作りたい。関東大会では大化けしてほしい」とエールを送る。

全国大会出場の前選を兼ねた関東高等学校演劇研究大会は、1月28日（土）・29日（日）の両日、取手市民会館で開かれる。



「まとまりがないことが部の強み」と清水教諭（後列左）